

思いがけなかつた色紙

澤田 悌

世に痛恨の極みということがあるとすれば、それは大平さんの急逝であつた。大平さんにはおよそ四十年にわたつてご厚誼をいただいたが、総理になられてこれから本当に活躍されようというときに、突然亡くなられようとはまさに痛恨事であつた。

昭和十六年八月、太平洋戦争に向つて風雲急を上げている頃、私は日銀から大蔵省へ出向し銀行局に勤務したが、そのときから同期の諸兄との交友がはじまり、その後永く大平さんとも親しくおつき合いを願ひ、また何かとお世話になることになつた。

大平さんは、役人としては比較的早く政界に出て着実に地歩を固め、期待された通り総理の座につかれたが、どうも本当に政治が好きなのかどうかと思わせられるような節がいろいろあつた。まことにご苦労様であつたという気がしてならない。

思いがけないめぐり合せで、私は日銀から国民公庫、公取委員会、日本住宅公団と仕事がかわつて今日にいたつたが、その転機ごとに大平さんの温かい激励を受けたことを感謝している。その間、独禁法改正問題に決着をつけるときも、公団の家賃改定を断行するときも当時の政府首脳の方々のご指導は申すまでもないことだが、大平さんの側面からのご配慮を忘れることはできない。

昭和五十五年三月十二日は大平さんの古稀の誕生日だつた。どこからもお祝いは固く辞退されるということだ

ったが、山下武利幹事の発意で同期の者が夫妻で勝手に集まってお祝いをしようということになった。総理は忙しいし、出席されても警戒嚴重になつて気楽に一杯やれないだろうから、代わりに女婿の森田ご夫妻に参加願うということにして、某ホテルで会食した。

その前に幹事から森田さんを通じて、できたら皆に一筆色紙をいただけないかとお願いしておいた。私は総理はどうせ沢山の書債がたまっているに違いないから、とても無理だろうと思つていたのだが、当日森田さんが一人一人にあてた大平さんの色紙を持参されたので、皆そのお心づくしに感激した。まさかその日からちよつと三カ月目に、大平さんが急逝されようなどとは誰も夢想だにしなかつたのである。

私がいただいた色紙の書は、「只尽凡心、開天地」というまことにいい言葉であつた。私は浅学にしてその出典を知らないが、あるいは大平さんの創作で、難局に当面していたあの頃、自ら心に刻んでおられた言葉ではなかつたかと思つ。さらには住宅公団で苦勞しているらしい沢田に対する激励の言葉でもあつたかと思われる。

私にとつては、これが大平さんからいただいた「絶筆」となつたが、書齋にかけて毎日仰ぎ見ながら、故人の手柄を偲んでいる次第である。

(日本住宅公団総裁)